

シンフォニエッタ 静岡 第81回定期公演

シンフォニエッタ 静岡が創立20年を記念して開催する公演の3回目。ヴァレーズで開始されたシリーズは、真にポスト・ヴァレーズと呼ばれるに相応しい作曲家の1人、クセナキスへと至った。ル・コルビュ

ジェ門下の建築家でもあったクセナキスは、音楽に数学的理論を持ち込んだ作曲家として知られるが、それは徒に衡学的なものではなく、1950年代に隆盛を極めたクラスタ（音塊）の音楽に、動力学的な

可能性を齎した。

ただ、当日のプログラムは、そういったクセナキスの作風からすると、些か大人し目の作品が並ぶ。作曲年代順に、前半に《アトレ》、《ネシマ》、後半に《エペイ》、《ワールグ》。

総じて丁寧な演奏が展開し、この丁寧さに見合った選曲と納得。特に《エペイ》、《ワールグ》。録音からは聴きとれない微分音由来の音響の軌みが独特で、楽曲への評価も一新させる成果。指揮は中原朋哉、《ネシマ》のメゾ・ソプラノに鳥木弥生、松浦麗。（10月10日、三鷹市芸術文化センター風のホール）

（石塚潤二）



アトレ



ネシマ



エペイ（作曲家指定の配置）



ワールグ